

集会での覚え書き 20160217 石川憲彦

時代の転換期	新しい酒は新しい革袋に！ どの次元で変化の方向を理解するか 人類史的（文明の老化と新生・・・音声言語・文字・画像） 歴史的（産業革命・明治・戦後）
多様さの意味	生物学的意味(生物多様性と単一種) 人間学的意味（弱き哺乳類「人」の特性としての共生） 妊娠・育児・社会の成立基盤：多様な脳と弱さ・できなさ 政治的意味（世界的意味・国家的意味・・・）
教育とは何か？	真似び(生存と共生)・特権階級・職業教育・寺子屋・学校
学校とは何か？	近代社会の洗脳：工業化・個人主義・民主主義・資本主義
能力とは何か？	障害児（者）はなぜ増加するのか？生産能力から調整力へ 新時代に期待される能力の発掘は、能力主義か？
自立とは何か？	障害を形成し、画一的非実体生産による共生の排除と単一化
国家権力と公教育	公教育からの排除と社会での新カースト
権力と戦争	ファシズムと戦争・民主主義と戦争 国家は何を守るのか（マルタ・ヘイトスピーチ）
国家とは何か？	群れ。信頼によって権力を委託する群れ。 信頼できる権力は変遷する（腕力・人力・経済力・軍事力・・・） 今、全ての信頼感が消失しようとしている（ex バブル・テロ）
国家を超える公？	グローバル化と民族主義の間で新たな公とは？ 民営化が生み出す体制末期のあがき
人間とは何か？	確実なのは、死・おろかさ(弱さ)、そんな命を今生きてること

今、もし教育を論じようとするなら、まず明確にすべきは

私たちは（労働は？国家は？世界は？etc）

どこに行こうとしているのか？

何を指すのか？

これから共生していくための方向性の共有ではないか！

何よりも、弱く危い、一人一人の声明を大切に守り育てるために

現在最も求められるものは、リアルな人間の出会いの中で信頼を再形成する教育  
貧困問題の抜本的対策  
真の国際性の模索

## この法案における政治力学

公共に金銭的依存をするときの条件の欠如

完敗した時      とことん有利になるまでもたれかかる(ex 倒産企業)

勝てそうな時    しっかり利用しさっさと退却圧力をかけ続ける (ex 医師会)

せめぎ合う時    方向付けを明確にし、力量を調整する

そもそも準備不足の泥縄

過去の総括の不在 (障害児教育で何が起こったか)

いや研究も手抜き (オルタナティブ教育の歴史)

論点の変動・公開性の欠如 (誰が蚊帳の外にいるのか?)

そのため政府が何を考えてこの動向を利用しようとするのかに無頓着

今は滅びゆく体制に誰がしがみついているのか?

江戸時代最晩期に幕藩体制に委ね藩校在籍資格を求める

せっかく物取り主義に走るなら、せめて大胆に

教育の自由の喪失      **LIBERTY free SCHOOL**

いまは広範な諸勢力を結集することが重要な時ですが、運動のさらなる発展のために、問題点を取り上げ、一緒に考えていきたいと思います。

SEALDs(シールズ: Students Emergency Action for Liberal Democracy - s)のおしゃれなホームページ <http://www.sealds.com/> によると、「自由で民主的な日本を守るための、学生による緊急アクションです。担い手は10代から20代前半の若い世代です。私たちは思考し、そして行動します」「SEALDsはSASPL(サスプル: Students Against Secret Protection Law/特定秘密保護法に反対する学生有志の会)の後継団体」と記されています。

SEALDsの運動方針には、正直言って失望を感じています。それについて少し書いてみたいと思います。

ナショナリズムが若者の間に広がっていることに、まず驚きました。

SEALDsは日本が世界、特に東アジアでより強いリーダーシップを発揮することを主張しています。たとえば「北東アジアの協調的安全保障体制の構築へ向けてイニシアティブを発揮するべきです」「特に東アジアの軍縮・民主化の流れをリードしていく、強い責任とポテンシャルがあります」といいます。東アジアで日本が主導権・先導力を発揮すべきだというのは、保守政治家などが主に唱えていることで、「軍縮・民主化の流れをリードしていくポテンシャルがある」というのは、独善的かつ傲慢な姿勢のあらわれといわざるをえません。

また、SEALDsによれば「中国は政治体制こそ日本と大きく異なるものの、重要な経済的パートナーであり、いたずらに緊張関係を煽るべきではありません」(「opinion」欄より)と、「国益重視」の外交を打ち出しており、果たしてこれが「学生運動」なのか、納得できません。

最も驚いたのは、日本の戦争責任に関するSEALDsの基本的な立場です。彼らは次のように主張します。

「歴史認識については、当事国と相互の認識を共有することが必要です」

「先の大戦による多大な犠牲と侵略の反省を経て平和主義／自由民主主義を確立した日本には、世界、特に東アジアの軍縮・民主化の流れをリードしていく、強い責任とポテンシャルがあります。私たちは、対話と協調に基づく平和的かつ現実的な外交・安全保障政策を求めます」

「歴史認識については当事国との相互の認識を共有」という極めて抽象的で曖昧な表現を用いて、SEALDsは次のように主張します。

日本はすでに「侵略の反省を経て」「平和主義／自由民主主義を確立した」といいます。しかし日本は過去の侵略戦争についてきちんと謝罪したことも反省したこともなく、平和主義と自由民主主義を「確立」したこともありません。彼らの無知と無自覚に、「危惧」を感じているのは私だけではないでしょう。

大事なのは、社会・労働問題について、歴史について真剣に考え、社会の底辺に目を向け、常に弱者の立場に立つて物事を考えることだと思います。